
原 著

世代間伝達と子育て支援 —親・乳幼児精神療法による分析—

新宮 一夫

鈴鹿医療科学大学 保健衛生学部 医療福祉学科

キーワード：親・乳幼児精神療法, 世代間伝達, 関係性障害, 子育ての混乱, 幻想の乳幼児, 想像の乳幼児, 現実の乳幼児, 抱きかかえる環境

要 旨

この論文の目的は、子育て支援に関係した二つの事例を通じて、母子の関係性および母親の子育ての混乱について考察することにある。

分析の要点は、世代間伝達と母子の関係性障害である。

事例の分析で重要なことは、母親が世代間を通じて重篤なトラウマを抱えていたことが子育て混乱の要因になっていたことと、その結果、母親と乳幼児の間には関係性障害が生じていたことである。

従って、関係性障害の改善のために、父母子や母子は、抱きかかえる環境の中で心の援助を必要とすることが明らかとなった。

1. はじめに

本論文では、育児や子育てのなかで、世代間伝達に関係した子育ての混乱に焦点を当てながら、子育て支援の課題を論じる。

そのために、「親・乳幼児精神療法」(mother-infant psychotherapy)¹⁾²⁾³⁾を試みた2事例の初回面接を通して、乳幼児精神保健の理論を手がかりに子と親の「関係性障害」(relationship disturbance/Emde, R.)⁴⁾の分析を行い、それに基づいて、子育てのよりよいサポートについて考察を試みる。ここでは、事例の詳細な治療的経過と結果についての考察はおこなわない。

なお、本論文で提示する事例については、プライバシーに十分留意した上で取り扱うものである。

2. 子育て支援についての基本的な認識

題名に子育て支援という言葉を用いるとき、その言葉の視点を整理しておく必要がある。

子育て支援を、福祉・医療・保健などの直接的対人サービスであるソーシャルワークという視点から見ると、どのような認識が大切か。これら児童領域の分野におけるソーシャルワークは、いわゆる少子化対策を主目的にした国から市町村へのトップダウン施策とは関係なく、それらの全てが子育ての支援である。保育、児童虐待の予防と対応、障害児の発達相談、養護相談、非行相談、子育て支援相談、育児教室、乳幼児健診の一部などがあげられる。今日、それらの何れもが子育てを支援するという要素を持っており、ただ単に、対象とする児童を援助するだけでなく、よりよい子育て支援をおこなうためのソーシャルワークを工夫していくという認識が重要である。

3. 子育ての混乱という概念について

子育て支援を論じる時に、関係機関や関係者の間では、子育て困難とか、子育て困難なケースという表現を使うことがある。何をもって、子育て困難と判断するか。これは、一概には説明できないほどデリケートで複雑な要素を併せ持っている。

子育ての混乱という概念を説明する前に、最初に子育て困難という言葉について、それが意味するものについての基本的な認識と、その言葉が与える影響について整理しておきたい。

子育て困難とは、文字通り、子育てをしている親か親の代理となる者が、何らかの理由や原因で子育てができない状態にあることを言い表している。例えば、親が病気で倒れて、他に親の代理をする者がいない状況。あるいは、離婚をした母親が夜間にまたがる仕事のために、乳幼児の世話が難しくなっている状況などが端的な例である。

一方で、保護者が育児や子育てを行っているにもかかわらず、子どもにとって望ましいとは思われない子育て環境や親子関係の状況、あるいは当事者がそのように感じて悩んでいるという場合にも、子育て困難とか子育て困難に対する支援という表現がめずらしくない。育児・子育て中の親が、「育児に自信がありません」「この子と向かい合っているとノイローゼになりそうです」などと訴えている事態は、それに関わる関係者をして、子育て困難という見方が強くなる。

このような現象に対して気をつけなければならないことがある。それは、子育て困難という言葉が伝えていくイメージと、子育て困難という発想そのものが及ぼす影響についてである。即ち、困難だから誰かの援助や支援を必要とするのだが、その際、援助や支援をする側には、育児・子育て機能の肩代わりをすることが支援策だという錯覚が生じ易い。

一方、子育ての当事者にしても、困難だから自分(たち)ではだめだと、子育てを誰か他の人に依存する傾向を強めることになりかねない。確かに、誰かが子育て当事者の肩代わりをしなければ、子どもの生命や基本的人権が守られない事態はある。しかしながら、どのような事例でも、初めから子育ての困難があるわけではない。さまざまな要因が複合しあって、現在、困難な状況に置かれている。

その、要因の一つとして重要な視点が子育ての混乱という概念である。

子育ての混乱とは、子育ての当事者が何らかの原因

によって、現在の子育てに混乱を生じている状態である。親の未解決な心の葛藤が、子と親の関係に投影されて、親子の関係性に歪を起こしている状態である。これを、乳幼児精神保健では、関係性障害と呼んでいる。そして、親は、何故子育てに混乱を来たしているのかについて気がついていないことが多く、子育てに不安や葛藤を感じつつも、それが子育ての混乱によるものだと自分（たち）では分りにくい。あるいは、それとなく気がついている場合もあるが、確証がもてないまま関係性障害から生じている様々な子育て上の悩みを抱え込んでいることもある。澤田敬は、育児の混乱の要因として、(a)現在何かのトラブルをかかえ、心の傷を受けている（児の出生に対する混乱、家庭内での不和、経済的困窮、本人・家族の病気、職場・隣近所との不和、相談相手がいない等）。(b)過去の心の傷を、今でも整理できていなく、乗り越えることができていない（子ども時代の被虐待または両親・家族に受け入れてもらえなかった心の傷、その後の心の傷等）。(c)幻想的乳児像、空想的乳児像、現実の乳児像の混乱を挙げている⁵⁾。

もし、子育ての混乱について、タイムリーでかつ、サポート的な援助を受けることができれば、混乱した糸が解かれてその結果、子育て困難な状態の予防と改善につながると考えることができる。これが、本論文における事例分析の最も大切なテーマである。

4. 事例1

(1) ガイダンスの形態と方法

ここでは、ある市町村における子育て相談の事例を取り上げる。この事例は、相談の依頼に基づいて、保健師2名と心理士1名が治療チームを組み、親子合同ガイダンスをおこなったものである。また、ガイダンスの1週間前に、保健師が母親との電話相談による援助を行っていた他、ガイダンス後には保健師が母親に、電話相談等によるガイダンスのフォローを実施した。参考としたガイダンスの基本的モデルは、元ジュネーブ大学児童精神医学教授で、ジュネーブ市の乳幼児児

童相談センター所長でもあったベルトラン・クラメールが実践している親・乳幼児精神療法である。

使用した部屋は1室で、子どもが遊ぶことのできるスペースと、親ガイダンスをおこなうコーナーが用意されている。主に、親ガイダンスを心理士（筆者）が担当し、保健師が子どもの遊び相手をしながら行動観察をおこなうが、保健師の1名がガイダンスに加わることもあった。また、心理士が子どもの相手にまわることもあり、スタッフ3名が比較的自由に動いている状況であった。要するに、子と親が同室で、スタッフはそれぞれに、子と親に対して「関与しながらの観察」(participant observation/Sullivan, H. S.)⁶⁾を続けながら、かつ、できる限りタイムリーに、過去のみならず目の前の親子間で生じている現象についても、子どもにも親にもフィードバックしながら子育て相談を実施した。子どもに対するフィードバックとは、一言で言えば、子どもがその場で安心していることができるような言葉かけやまなざしで包み込むことである。

ガイダンスの技術的な方法で、クラメールの親・乳幼児精神療法と大きく異なったのは、ガイダンスを収録するためのビデオを用いていないことである。その分、ガイダンスの最中に、親に対して子と親の関係性に関するタイムリーな助言が欠かせないものとなる。また、ガイダンス終了直後に、スタッフ間で互いの記憶を頼りに、ガイダンスの進捗状況および行動観察記録をまとめるように工夫をした。

(2) ガイダンスの概要

ガイダンス開始時の様子は以下の通りである。

母親の相談申込みによって、2歳4ヶ月の男児と両親の3人が相談室に来所した。子どもに関する相談の動機および内容は、そのほとんどが大人の相談である。特に、乳幼児の場合はそうである。このときの親の相談は、1ヶ月前から、子どもに強い吃音が始まったこと。2日間、全く声を出さないこともあったこと。それまでは、きちんとトイレトレーニングの躰ができていたのに、トイレで排便をしなくなったこと。以上が相談の主訴であった。

このような子どもの状態について、母親は子どもの発達に不安を抱いていて、「言葉は大丈夫だろうか」「この子はおかしいのではないかと、落ち着かない日々を過ごしていた。

最初に来所した時、母親の表情は暗くて緊張していた。子どもは最初、部屋に入ることを嫌がっていたが父親に抱かれて入室した。男児はしばらくの間、父親の膝の上におとなしく座り、一言も発することなく緊張した表情で部屋の様子や母親と心理士のガイダンスを見ていた。父親は、母親に比べると表情は若干穏やかであった。父親もまた、静かに母親のガイダンスを聴いていた。

ガイダンスを開始してから約20分後に、男児は父親の元を離れ、玩具の置いてある同室内を静かに探索し始め、間もなく保健師と遊び始めた。

男児の精神運動発達については、異常所見は認められず、ガイダンスの前に実施した乳幼児発達検査（津守・稲毛式乳幼児発達質問紙法）においても年齢相応の発達をしていると判断できた。

家族構成は両親、男児、4歳の兄の4人で、父親は大学出のサラリーマン。母親は家庭で、家庭教師の仕事をもちながら育児をしていた。両親とも実家は遠隔地にあり、アパート暮らしの核家族家庭であった。

（3）親ガイダンスの内容と進展

〈子どもの問題と親の葛藤〉

最初の訴えに続いて、この他にも幾つかの事実が明らかになった。それまでは2語文から3語文程度の言語表現や会話ができていたこと。パンツの中にお漏らしをしたりトイレ以外の場所で排尿するようになったこと。母親がトイレに連れて行こうとしても「なあーい」と言って従わなくなったこと。そして、1週間前から赤ちゃん返りがひどくなったこと。具体的には、「べたべたと、まとつくように甘えがひどくなりました。自分でおんぶ紐を持ってきて、しょっちゅうおんぶをせがみます」というものであった。

こうした子どもの変化に、母親の不安、いらだち、

抑うつ気分が続いていた。

「どうして喋らないのか」

「トイレはちゃんとできていたのに、わざと私を困らせているように感じました。」

「こんな小さい子どもに腹が立つなんて変ですけど……」

これらの様子を陳述している時の母親は、うつむき加減で表情が暗く、声のトーンも下がっていた。父親はそばで静かに聴いていた。このとき、男児はすでに父親の膝から離れて、保健師と同室内で玩具を使って遊んでいたが、表情は乏しく無言であった。しかし、ときどき心理士と両親の方に視線を向けては、親の様子を気にしている様子であった。

子育て上で、親が不安に感じたり困ったりしている子どもの行動・状態には、その始まりに必ず何かのきっかけがある。そして、子どもと親の関係性に微妙な狂いが生じている場合が少なくない。

これらに焦点を当てながらガイダンスを進めた。

〈1ヶ月前のエピソード〉

1ヶ月前に、母親と父親が夫婦喧嘩をした。暴力沙汰の喧嘩ではなかったが、男児の見ている前で相当に激しい言い争いとなった。その挙句、母親が一人で家を出ていった。男児は、母親に追いつがって泣くようなことはなく、黙ってじっと我慢をしていた。本格的な家出ではなく、母親はその日のうちに帰宅した。父親は出張のため、次の日から数日間、不在となった。朝、父親が出かけるときに、男児は激しく泣いた後、上記のような反応を出して現在に至っていた。

〈分析・その1、子どもの心的外傷と反応〉

ここまでの物語を聴いて、どういうことが想像できるであろうか。

まず第1点は、男児の一時的な失語、吃音という言語障害と、トイレ以外での失禁・失便の行動は、明らかに、能力の低下を来たして、それは男児が親の喧嘩のただごとにならない雰囲気心理的なショックを

受けたことに関係しているのではないと思われること。第2点は、母親がいきなり飛び出していったことに対する心理的ショック、即ち、一時的ではあっても2歳の子どもには見捨てられ体験による大きなショックがあったと考えられること。第3点に、出張による父親の不在が重なって、前日に続きダブルパンチのように別離体験のショックを受けたと想像されること。以上の推察は比較的容易にできよう。

相談スタッフは、誰もがこのことを直感していた。

では、次に、何ゆえ1ヶ月もの間、このような状態が改善されずに続いているのだろうかという推理が必要となる。もっと早くに改善していれば、おそらく親は相談援助を求めなくても済んでいたはずである。

その理由を探るためには、男児が受けているトラウマと、必要十分に癒されずに、症状として引きずっている要因としての親子間の関係性障害に焦点を当てる必要がある。

男児は、両親の激しい喧嘩の様子を、泣きもせず息を殺してじっと見ていた。

なぜ、男児は驚いて泣いたり、雰囲気恐怖が叫んだりしなかったのだろうか。あるいはできなかったのだろうか。そのような視点から、男児の現在に至るまでの子と親の関係、特に乳幼児期では母子関係に注目する必要がある。そして、1ヶ月前から起きたエピソードから現在に至るまで、改善することを妨げていたものは何であったかという要素を探る必要がある。

〈分析・その2、親の乳児像と関係性障害〉

母親の陳述によると、男児は乳児のときから、あまり手のかからないおとなしい赤ちゃんであった。前述の4. (3)の「親ガイダンスの内容と進展」にあるように、言葉の発達も順調でトイレトレーニングは完成していたという。男児は、どのような親子の関係性のなかで、発達したのだろうか。これらについて、両親はとても率直に過去を振り返ることができた。そして、そこからいくつかの注目すべき生活史が理解できた。

長男が2歳過ぎに男児が生まれた。母親は当時を振

り返り、「ただただ可愛い長男の育児に一生懸命でした」と語った。ところが、男児には特にしつけについて厳しく当たり、トイレトレーニングでは叩きながら教えた。子どもは極端に嫌がることもなく、母親のしつけに応じてくれたとのことだった。

それだけに、母親はこの度の子どもの状態には大きなショックを受けた。そのショックとは、この子の発達は大丈夫だろうかという不安と、子育ての失敗ではないかという自責の念にかられたもので、しかもその不安と葛藤を夫に話すことができなかった。母親は、期待をかけていた「想像の赤ちゃん」(imaginary baby/Lebovici, S.)⁷⁾と「現実の赤ちゃん」(real baby/Lebovici, S.)⁸⁾の差異を体験して混乱していたようだった。

このとき、同室で保健師と遊んでいる男児は、時々心配そうに母親に視線を送っていた。

ここで、男児の受けていた心理的ストレスが、ほとんど癒されることなく症状を引き伸ばしてきた理由は、徐々に明らかとなった。順を追って整理する。

- ・男児の性格的な資質は、乳児期から手のかからないおとなしい赤ちゃんであった。(両親の陳述)
- ・1歳過ぎから母親が厳しいしつけを始めた。暴力でしつけた。(母親の陳述)
- ・母親は、お兄ちゃんるときはただ可愛い気持ちで育てが、この子はどのように育ててきたのか分らない。(母親の陳述)
- ・母親は、男児の変化を受け止める余裕がなかった。子どもに対して腹立たしい気持ちを抱いた。(母親の陳述)
- ・男児は、この1ヶ月の間、父親に甘えることが多くなっていた。(両親の陳述)

ガイダンスを通じて以上のような事柄を整理しながら、両親に対して分りやすい言葉を使って以下のような説明を行った。

1. 男児は、喜怒哀楽の表現を我慢して親の期待に応えようとする、繊細で感受性の豊かな資質もっていると思われること。この点は、父親も

似ている資質だということであった。

2. 男児は、母親にもっと甘えたいという願望を持っていると思われること。
3. 男児の反応は、とても自然な反応であり、症状として出せたことはよかったと思われること。
4. 両親が、男児の心理的ショックを受け止めて、「心の安全基地」(a secure base/Bowlby, J.)⁹⁾を回復すれば、比較的早期に子どもの問題は改善すると思われること。
5. そのためには、1週間前から母親に求め始めている赤ちゃん返りを、心配することなく受け止める方向でよいこと。具体的には、1歳半レベルまでさかのぼることもあり得ること。

以上の説明・アドバイスに対して、両親は何度も頷きながら傾聴された。

母親は、「少し、ほっとしました」と言い、父親も「そうだったんですね」と安堵の表情を見せた。このときの男児は、声を出して会話をしながら保健師と遊びはじめていた。

〈分析・その3、表象の意味と投影対象〉

さて、ここまでのガイダンスは、分析と治療が比較的容易な内容である。

親ガイダンスを通じて、親とスタッフは、男児の問題の発生要因とその対応策にまで到達したことになる。外科の治療に例えると、一応の応急処置が終わった段階であるが、子育て支援の相談としては、ここから更にもう一歩踏み込んだガイダンスを必要とする場合が少なくない。

そこに立ち入るかどうかは、親の抱えている葛藤の深さ・強さによると考える。主に、子育て中に蘇りやすいとされる未解決な心の葛藤である。「お母さんの子ども時代はどんな様子でしたか」というさりげない質問から、母親の深い葛藤が語られた。

この事例における男児と母親の関係性障害とは、一つには、乳児期から母親が男児に与えていた期待値の高さによって、子どもがストレスを受け、「ミクロの心的外傷」(ミクロ・トラウマ/渡辺久子)¹⁰⁾が累積して

いたことである。そして、一時的にせよ目の前から突然、母親が姿を消したことによる「ミニの心的外傷」(ミニ・トラウマ/渡辺久子)¹¹⁾を受けた後、それが母子関係の中で修復されずに今に至っているという事実である。

母親は、自分の両親からたいへん厳しいしつけを受けて育った。両親に叩かれたという辛い思い出があった。母親は長女で生まれ、下に弟が一人いた。ところが、親は長男である弟を可愛がり、彼に対しては厳しくなかった。

母親はそのことについて、「今でも、この歳になっても母を恨んでいます」。「特に、私は、弟との比較で母を恨んでいるのです」と涙をこぼしながら語り、わが子のしつけには、「この子のトイレトレーニングなんか、すごく厳しくしつけました」。「暴力でしつけました」と述懐した。

つまり、この母親の暗い過去や未解決な心の葛藤には、いつも母と弟が絡んでいるということが分かった。

そして、もう一つの事実は、わが子にはそういう思いをさせないような子育てを試みる可能性もあったが、現実には、同じような、あるいはそれ以上のスパルタ式で子どもをしつける道をたどったということである。

ここに見られる子育ての世代間伝達が、男児と母親の関係性障害の成り立ちに深く関わっていた。その点について、クラメールの表象の方向付けをもつ親・乳幼児精神療法による分析理論を手がかりに、若干の分析を試みた。(実際には、ガイダンス後のケースカンファレンス等を通じて整理されたものである)

第1点は、男児が母親の投影対象となっているという推察である。即ち、暴力的に厳しく育てられた過去の中で、甘えや心地よい愛着を求めても応えてもらえなかった母親の母親に対する恨み、怒りの感情が、子どもに投影されていると見るのが可能である。では、何ゆえに投影対象が長男ではなくて男児に向けられたのだろうか。

第2点は、「弟との比較で恨んでいる」という母親の感情についての推察である。つまり、この母親にとっ

て、男児に投影されている心理は、単純に親との関係を映し出しているものではないということである。

母親は弟に対して、自分と差別されていたことに対する嫉妬があった。母親の幻想的世界の中で、男児の存在はかつての母親の弟の存在と重なり、男児を素直に受けとめることができなかつたと見ることも可能である。

第3点は、「ただ可愛かった」長男が、2歳過ぎに男児が誕生していることから、この時期、母親の子育てのエネルギーや愛情は、主に男児よりも長男の方に向けられていたであろうと想像できる。男児について、「この子はどのように育ててきたのか分からない」という母親の陳述が、そのことを物語っている。

幾つかの推理・分析が可能であるが、今、臨床的にもっとも大切なことは、このガイダンスにおいて、母親が自分の生い立ちと自分の子育てについてどんな想いで振り返り、どんな想いで語り、そしてどのように気持ちが動いているかということであった。

母親は、自分の過去を泣きながら語っていた。その語り口調は、自分の親への怒りから次第に、自分の子どもへの接し方を後悔しているような語り口調に変わっていた。

一方、この様子をそばで静かに見守っていた父親は、一体どんな想いでいたのだろうか。また、父親の生い立ちと父親と男児の関係性はどうかであったか。これらのことについて、父親もまた、正直に語った。

「私の親も、とても厳しかった」

「私も、幼児から小学生の頃に少し吃音になったことがありました」

「だから、今の子どもの状態がなんとなく分かるし、今日の話も分るような気がします」

「夫婦喧嘩をする前から、親の雰囲気が悪くなかった。子どもは母親に甘えていませんでした。私に甘えようとしていました」

父親は、自分がされてきたような子育ては、わが子にはしたくないという気持ちがあったという。

しかし、母親の子どもに対する厳しいしつけに対して、母と子の間に入っていけなかつた。乳幼児期は、

母親と子どもの密着度が大きいため、父親はなかなか間に入り込めないという一般的な状況も考えられたが、後に、私たちスタッフは新たな真相に気づいた。

父親もまた、厳しい親に育てられたと話されたのであるが、父親にとってその過去は、暗くて辛い未解決な問題ではなくて、ある程度心の整理がなされている過去であった。それに比べて母親は、「今も親を恨んでいます」と言うほどに、過去が過去としてでなく現在の葛藤そのものに繋がっていた。すなわち、子育てを通して、子どもの存在が母親の辛い過去を誘発していた。

この、父親と母親の差異は大きいと同時に、この家族・男児にとってとても幸運なことだと言わねばならない。

スタッフは、ガイダンス後のケースカンファレンスにおいて、以上の〈分析・その3〉で明るみにされた子育ての世代間伝達と、母親の親に対する未解決な心の葛藤が男児の子育てに投影されて、母親が抑うつ的になり悩んでいたことが、子と母親の自然な関係性を邪魔していたという仮説をたてた。また、ガイダンスでは、子育ての混乱と、母子の関係性障害について簡単な感想を述べた。このガイダンスで、両親が過去を率直に語られたこと自体が、すでに解決へ向かって歩いているのであるという感想も付け加えた。さらに、父親がガイダンスに同席されたことはとてもいいことで、大きな意義があったことを話した。

そして今後は、保健師との電話相談等で、男児の様子を伺いながら子育て相談を続けることを約束して初回ガイダンスを終えた。

最後に、母親は、入室した時の暗く憂鬱そうな表情とは違って、少し笑顔も見せながら男児の手をとって部屋を出ていった。父親は、「来てよかったです」とほっとした表情で話された。男児は、未だ笑顔こそ出なかったものの、約、90分前に入室したときに比べると多少リラックスした様子であった。

5. 事例2

(1) ガイダンスの概要

次の事例は、同じような方法で試みた子どもの夜泣きに悩む母親の子育て相談である。

2歳6ヶ月の女兒を連れた母親が、親子とも緊張した面持ちで来談した。女兒は母親に手を引かれて入室した。女兒の表情は固かった。

「この子は、この2年間に5日しかまとともに寝てくれません。この子は変ではないですか」

これが、母親の相談の主訴である。

「こんなに育てにくいとは思わなかった。可愛く思えません」

これが、主訴の次に語られた母親の思いである。

〈育児がいちばん大変なこの時期に、夜、寝てくれないと親はまいるよね。でも、よくここまで頑張ってきてきましたね〉と、母親をねぎらいながらガイダンスを続けると、この母親には妊娠中から深い心労のあったことが分った。女性にとって、妊娠から出産に至る間は、未来に向かって最もハッピーな気持ちに包まれていいはずなのに、この時期に母親は、夫の浮気に悩まされ暗く憂うつな葛藤の日々を送っていて、それは今も続いていた。

「別れようか……生まれてくる子どもの将来はどうなるのだろう」と思い悩んだという。

(2) 事例2の分析

〈分析・その1、親の乳児像〉

周産期は愛着の曙であり母子の心の絆は、子どもが胎内にいるときから始まっていると言われる¹²⁾。そして、誕生後、女兒は母親の瞳の中に何を見ていたのだろうか。また、母親は誰にも言えない不安と苛立ちの中で女兒を抱く時、赤ちゃんの瞳に何をみたであろうか。

母親は、夜中にギャンギャン泣く子どもをあやしながら、夫からは育児を責められていた。母親は、ふと昔の自分が育った子ども時代を思い出した。母親が幼

児期に、両親が離婚して母親が家を出ていった。一生懸命、わが子をなだめながら子どもを見つめていたら、その時の寂しさが急に蘇ってきたと述懐した。レボヴィッチやクラメールの言う、かつて自分が赤ちゃんだったときの心を映し出す「幻想的な乳児」(fantasmatic baby/Lebovici, S.)¹³⁾の世界は、理屈ではないだけに、誰にも話せない得体の知れない感情であった。

「自分の家族も壊れるのではないかしら。もっと育てやすい、幸せな親子関係を思い描いていたのです」

夜泣きを続ける現実の赤ちゃんは、母親の描いていた想像の赤ちゃんと大きくかけ離れる結果となっていた。

〈分析・その2、世代間伝達と関係性障害〉

母親が最初に訴えた相談内容は、激しい夜泣きを続ける子どもについての不安と、それに悩まされている子育ての不安であった。ガイダンスを進めていくうちに、その原因は、女兒が乳児期から母親の不安と葛藤を敏感に感じ取り、母と子の間には微妙なりズムの狂いが生じていたことが考えられた。また、両親の不協和音の環境は女兒にとって居心地のいい場所ではなかったと想像できた。父親は、ほとんど女兒を可愛がる様子がなかった。女兒の精神運動発達は正常で、既往歴にも特筆すべきものはなかったことから、女兒の夜泣きは女兒と母親、女兒と両親の関係性の中で、女兒が不安を訴えていたという関係性障害として理解できた。母親は、ガイダンスを通じて、女兒の夜泣きの現実的な原因を理解されたと同時に、自分自身の世代間を通じた不安と葛藤が乳児期から伝わっていたことについても、「分るような気がします」と言われた。夫婦の問題は未解決であるが、少なくとも子どもに対する不安感は軽減した。

今まで、家庭内が落ち着いていなかったのも、子どもの写真もあまりないということだった。保健師がボラロイドカメラで、母親に女兒が抱かれている姿を撮って手渡すと親子とも嬉しそうに受け取った。来談した時に比べると二人は緊張もとれて、母親はしっかりと女兒を抱いて退室した。

6. 考察

(1) 母親の表象の表出および子どものトラウマ

以上述べてきた事例分析とその治療について、今少し考察を深めながら子育て支援の臨床における今後の課題を論じる。

事例1, 2とも、子育て支援活動や発達相談ではごくありふれた相談内容である。しかしながら、主訴や子どもの症状の背景には、誘発因となったエピソードだけでなく、母親の未解決な心の葛藤による母親の世代間を通じた恨み・怒り・不安の感情等が関与していることが分かった。事例1では、厳しい親の元で、十分に甘えることができなかった母親のトラウマが、育児を通じて、母親の無意識的記憶を思い起こさせ男児へ投影された。母親の母親に対する表象の表出である。即ち、男児は、母親の投影対象となって、暴力を伴う厳しいしつけを受けていた。母親は、時々、「叩くのはよくないことだろうな」と自責の念を覚えながらも行動を制御できなかった。それは、子育ての混乱状態であり、それが修復されずに長引くと子育て困難の状況に陥る可能性は否定できなかった。

一方、男児は、「再接近期」(rapprochement phase/M. S. Mahler)¹⁴⁾において甘えたい気持ちを我慢しながらこのしつけを取り込んでいった。子どもには心理的な欲求が満たされないというストレスが継続していたと想像できる。加えて母親の厳しい態度は、決して心地よいものではなかったはずで、男児はミニ・ミクログトラウマを累積させていたと言える。しかし、それが母親との愛着関係を築けないほどのトラウマであったとは考えにくい。ガイダンスの1週間前に、保健師と行われていた電話相談で、「今は、赤ちゃん返りをしても何も問題ないから、甘えを受けとめてあげるといいですよ」というアドバイスを母親が素直に受け入れた結果、途端に赤ちゃん返りがひどくなり、おんぶ・抱っこを強く求め始めていたからである。

(2) 母親のトラウマと世代間伝達

事例2においても、母親のトラウマと世代間伝達による子と親の関係性障害がポイントであった。夫の浮気という現実的な悩みが、妊娠中から母親の幼児期の辛く寂しかった感情を揺り動かし、そこから生じる不安感と葛藤が子どもに伝達していった。ウイニコットは、「母親の顔の中に、赤ちゃんは自分自身を見る。もし、母親が抑うつ的であれば、赤ちゃんは全てを顔に読みとる」と言っている¹⁵⁾。

母親もまた、泣きぐずる女児を相手にしながら、赤ちゃんの瞳の中に自分の辛い過去を覗き込んでいた。

(3) サポートティブな援助関係

育児・子育て相談において何よりも大切なことは、それに関わる者によって子と親が、ウイニコットの言う「抱きかかえる環境」(holding environment/D. W. Winnicott)¹⁶⁾に置かれることである。英国のタピストック・クリニックの児童精神療法家であるジュリエット・ホプキンスは、このウイニコットの比喩的な表現は、乳児からのケアのあり方がすべて含まれていて、治療者・患者の関係にも同じことが言えることを指摘しているのだと述べている¹⁷⁾。また、渡辺は、ジャスティン D. コールの言葉を紹介して、すべての医療、人へのケア、保育や教育に必要なこととして最も注意しなければいけないことは、「絶対に、自分より幼く弱い存在に対して害をすることなかれ」であると強調している¹⁸⁾。最初から子育て困難と決めつけて一方的に指導するのではなく、温かくホールディングされた治療的雰囲気の中で、子と親の関係性及び行動を観察しつつ徐々に世代間の問題をいっしょに振り返っていく作業が大切である。この作業に寄り添っていく者が、ときに子育てのサポーターであり、ときに治療者となる。

そして、このような支えがタイムリーに得られたとき、クラメールが、「運命は治療できる」、「破局の結果を治療するよりもむしろ、破局を未然に防ぐのである」¹⁹⁾と言っているように、親と子は、新しいシナリ

オを描いていく勇気と元気を獲得していくのである。

7. 終わりに

クラメールは言っている。

「人は、幼年期の経験をもとにして自分から親になる。われわれの中に眠っている子どものときの記憶を通して、赤ん坊の存在を発見していく。そして、われわれが子ども時代に受けた親の反応を模倣しながら、赤ん坊を教育していこうとする」²⁰⁾

「私たちの歴史は、両親の過去という先史に基づいている」と²¹⁾。

それ故に親自身の生い立ちを通じて、親のライフサイクルの中で未解決な心の葛藤が語られて整理されていく援助があるのである。これを抜きにしては、子どもの、あるいは家族間の問題は何回も繰り返されることになる。親の葛藤が、ある程度整理され支えを得た時に、親はいつそう心から愛しいと思ってわが子を抱きしめることができる。そうすれば、乳幼児の場合、問題が改善していく可能性は高くなる。

反対に、夜泣きを続けている子どもに、「あなたのこと、怒っていないよ」と言いながら抱きしめても、心の中では「この子は可愛くない」とか、「なんで泣くの」、「お母さんに嫌がらせをしているつもり？」などといった怒りが心の大半を占めていたのでは、本当に子どもが安心して居心地よく抱かれて甘えを満たしてはいけない。それでも子どもは、抱かれないで放って置かれるよりはましかもしれないが、敏感な子どもは症状を一進一退させながら長引かせることになる。もし、仮に親のトラウマと葛藤が深く、関係性障害が重篤な場合には、安易にスキンシップを薦める助言が子と親の関係性をよりぎこちないものにしてしまうことさえある。

ところで、本論文で述べた子育て支援のワーキングは、専門的な訓練や臨床経験を積んでいなければ実践が不可能だろうか。筆者の答えは、否である。確かに、トレーニングを積んだ者でないと対応が難しい事例は存在するが、そうでない場合も多い。多くの親の場合、自分がかつて子どもだったときの話や妊娠中のこと

を、援助者とさりげなくいっしょに振り返りながらもつれた糸を解いていくことができると、親は新たな気づきを体験する。その体験は子育て支援において、親子にも援助者にもとても有効な支援のきっかけになる。以上、述べてきた一連の作業は子育て困難という発想に基づくものではない。世代間伝達と関係性障害に着目した子育て支援とは、子育ての混乱という発想によるものである。

謝辞

筆者は、1994年以来幾度かのセミナーにおいて、ベルラン・クラメール教授から「親・乳幼児精神療法」を学ぶ機会に恵まれ、その理論を拠り所にししながら、稚拙ではあるが乳幼児精神保健の臨床経験を積むことができた。ここに、クラメール教授と日頃から多くのご助言とご指導をいただいている慶応義塾大学医学部小児科学教室の渡辺久子先生に深く感謝を申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 渡辺久子, 乳幼児精神療法の実際, (小此木啓吾・小嶋謙四郎・渡辺久子 編), 乳幼児精神医学の方法論, 岩崎学術出版社, 145, 1991
- 2) 渡辺久子, 乳幼児精神医学から乳幼児精神保健へ, 渡辺久子・古澤頼雄・小倉清, 他: 乳幼児: ダイナミックな世界と発達, 安田生命社会事業団, 18, 1995
- 3) 渡辺久子, 母親—乳幼児治療: 世界の最前線, ころの科学, 66, 64-65, 1996
- 4) 渡部久子, 母子臨床と世代間伝達, 金剛出版, 59, 2000
- 5) 澤田敬, 子育て混乱父母に対する子育て支援—虐待予防の試み, 周産期医学, 31, 821, 2001
- 6) 加藤正明・宮本忠雄・小此木啓吾, 他: 精神医学事典, 710, 1985
- 7) 渡部久子, 前掲書, 4) 23
- 8) 渡部久子, 前掲書, 4) 23
- 9) John Bowlby, A Secure Base- Clinical applica-

- tions of attachment theory, 二木武監訳, 母と子の
アタッチメント・心の安全基地, 医歯薬出版, 14-15,
1993
- 10) 渡部久子, 乳幼児精神保健の新しい動向, (渡部久
子・橋本洋子編), 乳幼児精神保健の新しい風, ミネ
ルヴァ書房, 6-7, 2001
- 11) 渡部久子, 前掲書, 10), 6-7
- 12) 渡部久子, 前掲書, 4), 49-50
- 13) 渡部久子, 前掲書, 4), 49
- 14) 渡部久子, 前掲書, 4), 60
- 15) W. Winnicott, Babies and their mothers, 成田善
弘・根本真弓訳, 赤ん坊と母親, 岩崎学術出版社,
108, 1993
- 16) Juliet Hopkins, Attachment and the Holding
Environment, 渡辺久子訳, 愛着と抱きかかえる環
境, (渡辺久子・橋本洋子 編), 乳幼児精神保健の
新しい風, ミネルヴァ書房, 24, 2001
- 17) Juliet Hopkins, 前掲書, 16), 24
- 18) 渡辺久子, 乳幼児精神保健の課題, FOUR WINDS
全国大会報告集, FOUR WINDS 世話人会, 8, 22,
2004
- 19) Cramer, B. G, PROFESSION BÉBÉ, 小此木啓吾・
福崎裕子訳, ママと赤ちゃんの心理療法, 朝日新聞
社, 205-209, 1994
- 20) Cramer, B. G, 前掲書, 19), 18
- 21) Cramer, B. G, 前掲書, 19), 205-209

Intergenerational Transmission and Support of Child Care —Analysis by Mother-Infant Psychotherapy

Kazuo SHINGU

Department of Health and Welfare, Faculty of Health Science, Suzuka University of Medical Science

Key Words: mother-infant psychotherapy, intergenerational transmission, relationship disturbance, confusion of child care, fantasmatic baby, imaginary baby, real baby, holding environment

Abstract

The purposes of this paper are to consider the parent and child relation and confusion of child care.

The points of the analysis are intergenerational transmission and relationship disturbance between mother and infant.

What is important is that the mother had serious trauma over generations which was the cause of confusion.

As a result the relationship disturbance between mother and infant was brought about.

Consequently they needed mental health care in holding environment.